

# AR CA DIA

59  
WINTER 2014

Okazaki City Museum News

岡崎市美術博物館ニュース  
[アルカディア]



OKAZAKI  
MINDSCAPE  
MUSEUM

岡崎市美術博物館

# 眼の極楽⑩ 江戸の花園

館長 榊原悟

初音、聞かせよ

年たちかへる朝の空のけしき、なごりなく曇らぬうららかなげさには、数ならぬ垣根の内だに、雪間の草若やかに色づきはじめ、いつしかとけしきたつ霞に、木の芽もうちけぶり、おのづから人の心ものびらかにぞ見ゆるかし

うららかに晴れた元旦の朝の初景色は、ものすべてが洗われたようで、美しい。春が来、木の芽も張る。その芽がほのぼのとかすむさまを見ると、人びとの気持ちまで伸びやかに若やぐ。

『源氏物語』初音の帖冒頭の二節だ。内容といふ、語呂といふ、どこか音読したくなる。そうであればこそ、毎年正月になると三条西実隆(室町時代最高の知識人公卿 一四五〇―一五三七)は、

二日乙巳天晴、入夜月新、日新慶祥幸甚々々、行水、看経、朝浪之後、覽初音卷、是嘉例也  
『実隆公記』明応六年(一四九七)正月二日の条

と記すように、一日の般若心経の書写や柿本人麻呂画像の前での「試筆之祝詞」に擬えた歌詠と共に、この『源氏物語』初音の帖を見ることを、その嘉例の行事としていたのだろう。さしずめ冒頭の二節など、音読されたに違いない。だが、それもこれも初音の帖が、この前年(光源氏三五歳)の八月、壮大な四季の町として落成した六条院で、初めて迎える春の様子を述べたものであってみれば、この一帖を読むことは、実隆ならずとも万国昇平の春を言祝ぐには最も相応しいと思うはずだ。しかもこの後、若菜の帖に至るまでの十年余り、この六条院を舞台に源氏は栄耀栄華の生活を送る。その華麗な王朝絵巻の幕あけを告げるのが、まさしくこの初音であった。

その帖名が、戌亥(西北)の冬の町にひっそりと暮す明石の君の、辰巳(東南)の春の

町に源氏や紫の上と住む明石の姫君に、

けふうぐひすの初音きかせよ

と、初便りを求めた歌にちなむことはすでに述べた。年月を松にひかれて春の町に暮す姫君からの便りを待つ心を、春の到来を告げる鶯の初音を待つ気持ちに重ねたのである。

しかも明石の君は、その和歌に添えて、果物や花などを入れた鬚籠や新年の食物を入れた破子と共に、五葉の松に移り留まる鶯の作り物を贈っている(図)。本来、梅の枝に留まるはずの鶯を、松の枝に留まらせているのだ。むろん、この鶯こそが、別れて春の町に居る姫君と云うのだろう。母として明石の君の初音を待つ気持ちは、せつないほどに切実であった。その気持ちを、「松に留る」鶯の作り物で象徴させた。

そう云えば、帖名にもなっているように「鶯」の「初音」は、この帖のキーワードであったはずなのに、物語本文で鶯が実際に初音を聞かせることはなかった。すべてをあの作り物で代弁させた。作者紫式部の語りは見事と言うほかないと思うのだが、どうだろう。

面白いのは、その母の願いに答えた明石の姫君の初音(返歌)だ。

ひきわかれ年が経れども鶯の

巢だちし松の根をわすれめや

巢立つた松の根―生みの母を、どうして忘れましょうか、と詠った。この歌に対して作者紫式部自身は、

幼き御心にまかせてくださしくぞある

と評した。幼い心にまかせて詠んだもので、すつきりした歌になつていないと云う。言うまでもなく、鶯の初音のたどたどしさに擬えたのである。王朝人の歌の心は鶯の鳴き声の巧拙を聞き分けていたのである。

見逃し難いのは、この鶯の初音を俳諧も吟じていた点である。

うぐひすの麁相がましき初音哉

うぐひすの枝ふみはず初音哉

いずれも蕪村である。問題は蕪村が、いま述べた『源氏』初音の帖のいきさつや、明石の姫君の返歌を知っていたか否か、であるが、わたしは次掲の其角も含め知っていたと思う。いや、さらにこれらの句は、姫君の歌を踏まえていた、とさえ考えている。

鶯の身をさかさまに初音かな

其角

この句に対して稀代の名吟と称する一方、いくら初音とは云え、身を逆さまにして鳴くものか、との批判が当時からあったようだが、その伝でいけば、「枝ふみはずす」こともなかったはずだろう。だが、蕪村も其角も、そう言い切った。むしろ、こうした「麿相がましき」未熟な動作が、初音のたどしさを修辞であったのだ。まさしく俳諧である。

つまり和歌の心は、初音のたどしさを聞き分けていたものの、それはあくまでいずれ十全通り鳴くための一階梯と捉えていたに過ぎなかったのに対し、俳諧の風狂は、そのたどしさを、面白いと断じたのである。

そう云えば蕪村は、こうも吟じている。

老鶯兒

春もやゝあなうぐいすよむかし声

清少納言が「夏秋の末まで老い声に鳴きたると」と眉をひそめた、あの季節外れの鳴き声に、「あな憂」の「うぐいす」と掛けることで、老いた鶯の物憂い声と判じ、晩春懐旧の情を歌った。これまた見事な修辞だと思ふのだが、と述べてくると、読者の中には和歌より俳諧の方が優れているとでも弁じたのか、と思う方もいるかもしれない。確かにわたしは俳諧の修辞学が好きで興味をもつものだが、別にここで和歌・俳諧優劣論を展開したいのではない。そんな埒もない、いや難しい議論は、身に余る。

述べたいのは、単純なことだ。和歌と俳諧、同じ歌でありながら、二つが取上げる花や鳥には、思いのほか大きな違いがあった。そのことである。さらに同じ花や鳥であっても、それらを見つめる眼、つまりは目の付けどころが自ずから異なる、と云うことだ。鶯の、その初音を狙上へのぼせたのも、この場合にこそ両者の違いが際立っていると思つたからである。銘記しておきたい。

これに関連して改めて考えるべきは、それこそ初音の帖の舞台となった六条院のことである。源融（八二二〜九五）の河原院を範にしたと云う。六条京極あたりに四町四面（四三二メートル四方）の広大な敷地を有していた。二町一季節、四季の町より成る。そ

ここに光源氏は、ゆかりの女性たちを住ませた（少女の帖）。

春の町（殿のおはずべき町）

紫の上

夏の町（夏の御住まひ）

明石の姫君  
花散里

（丑寅の町の西の対）

玉鬘

秋の町（梅壺中宮の御町）

秋好中宮

冬の町（北の西の町）

明石の君

女性たちは、初音から行幸の帖までのほぼ一年余り、ここを舞台に季節の移ろいの中で雅のこころを競う。秋好中宮と紫の上の、春秋の優劣を競うやり取りなどが、それである。言うまでもなくそれは万葉以来の文学論争「春秋のさだめ」の伝統を承継ぐ。天智天皇が藤原鎌足に詔して「春山万花艶」と「秋山千葉彩」を競憐はしめたと云う。紫の上と秋好中宮は、その王朝擬人化であるに違いない。

その二人が、春秋の美を誇示、象徴するものとして、お互いに贈呈し合ったのが、銀と金の花瓶に挿した桜と款冬であり、御箱の蓋にのせた、色とりどりの花紅葉であった（少女、胡蝶の帖）。まさしく万花艶と千葉彩である。それらの花、紅葉は、それぞれの町の庭に咲く花、紅葉であったのだろう。むしろ春と秋だけではない。夏と冬の町にも庭があり、その季節を象徴する草花や樹木があった。そうした四季の美しい庭の完備した四つの町からなっていたものこそ六条院であった。そこにゆかりの女性を住ませる。光源氏にとつての理想境である。

注目したいのは、その理想の園に咲く花々、樹木がどんなものであったか、である。それらが王朝人の目を引きつけてやまなかったものであることは間違いない。しかし、それらを見つめる眼が、わたしたちや江戸の人びとのそれと同じであるはずもない。となれば江戸の人びとが見つめた花園を知るためにも、まずは六条院の庭に咲く草花を確かめておく必要があるに違いない。



明石の君 姫君に松に鶯の作り物を贈る  
『源氏物語画帖』（京都国立博物館蔵）より



平成時代も四半世紀が過ぎ、昭和の時代は「昔の暮らし」になりました。あの頃の生活を私たちはどう振り返るのでしょうか。

この展覧会では明治から昭和時代にかけての生活道具を紹介するとともに、学校で使われた教科書や道具類、雛飾りと鎧飾りなどお節句の人形を展示いたします。いずれの道具も長年にわたり多くの方々から寄贈していただいたもので、岡崎市の財産である郷土の暮らしを伝える資料を公開し、後世へ伝えることも目的としています。また、家にある時は、ほこりをかぶり片隅に追いやられ、いつかは捨てられる運命にあったモノたちの、そして、博物館収蔵庫でもいつもはガラクタとも呼ばれ、何かと肩身の狭い思いをしているモノたちの晴れ舞台でもあります。

#### 展示構成

##### □暮らしを支えた道具たち

生活スタイルの変化や技術の進歩に伴って、伝統的な生活道具は姿を消していき、今を生きる私たちは便利な生活を楽しんで暮らしています。ここでは衣食住などの生活道具を、岡崎市内で実際に使われたものを中心に紹介していきます。生活道具がいかに姿を

え、私たちの暮らしがどれほど便利になったのかを振り返ってみてください。

##### □学校

—むかしの教科書を中心に—  
日本の近代的な学校制度は今から一四〇年ほど前、一八七二（明治五年）の学制発布に始まります。暮らしの道具と同じように、小学校で勉強することにも、教科書にもうっかりかわりがありました。ここでは明治から昭和戦前にかけて小学校で使われた教科書を中心に、学校での道具などを展示します。

##### □お節句

—ひなまつり・端午の節句—  
雛人形を飾ることも、鯉のぼりがあることも日本人が繰り返して行ってきたお節句の行事です。ここでは、ひなまつりと端午の節句に関わる節句飾りと、素朴な愛らしさの土人形を中心にご覧いただきます。間もなくやって来る暖かな春の気配を感じながら、子どもの誕生を祝い、その健やかな成長を見守ってきたお節句の人形たちをお楽しみ下さい。

なお、昨年に引き続き公立小学校3年生が、昔の道具や生活について調べる学習の支援を兼ねた展覧会です。平

## EXHIBITION

日には学校団体見学があります。子どもたちに昔の道具の実物を間近に見てもらう機会を提供し、身の回りの古い道具を調べたり探したり、昔の暮らしをたずねたりする手助けになればと考えます。ご来場の皆さまのご理解をいただくと同時に、会場に居合わせた大人の方は、道具を使った経験談を話してあげて下さい。きつと何よりの解説になるはずですよ。

ここに集められた道具たちは、日々の暮らしを支えてきた働きモノたちです。長い間使われてきた道具たちは、今、私たちに何を語りかけてくれるのでしょうか。単に懐かしさを感じるだけでなく、長い年月をかけて先人たちが築き上げ、伝承してきた生活の知恵と工夫を見直していただければと思います。

最後に、数々の資料をご寄贈下さいました方々に心よりお礼申し上げます。そして、今後とも本館の資料収集や保存、活用につきましてご理解、ご協力を賜りますことをお願い申し上げます。

### 収蔵品展

# 暮らしの うつりかわり

伊藤久美子



箱箒筒

会期：平成26年1月11日(土)～3月23日(日)

# 藤井達吉の全貌

野に咲く工芸 宙を見る絵画

千葉真智子



大島風物図屏風(左隻)  
碧南商工会議所蔵

気が早いと思われるかもしれませんが、来年度の最初を飾る展覧会について、ご紹介したいと思います。

同展で取り上げるのは「藤井達吉」です。近所の碧南市に「碧南市藤井達吉現代美術館」も開館したことから、その名を耳にしたことのある方も多いのではないのでしょうか。藤井は、一八八二(明治一四)年に碧南に生まれ、一九六四(昭和三九)年に岡崎で最期を迎えた作家で——市民病院で亡くなったと聞けば、多少は親近感がわくのではないのでしょうか——一般的には工芸家とされていますが、そう呼ぶべきか迷うのは、手がけるものが非常に多岐にわたります。工芸作品自体も雑多なうえに、精力的に日本画や和歌などにも取り組んでいたからです。今回は、そうした藤井の全貌をご覧いただくべく、初期から晩年に至る作品を網羅的に展示します。既に昨年十一月から共同開催の宇都宮美術館で展覧会がスタートしていますが、非常に見応えのある内容になっています。

かつて藤井は、小原和紙や瀬戸の陶芸など「郷土工芸・郷土美術」の再興に力を入れたことから、地元の大先生というローカルな土俵において顕彰されて

## EXHIBITION

きました。しかし、ここ二十年ほど、愛知県美術館や東京国立近代美術館での展覧会を契機に、大正・昭和初期の東京での活動の再評価が進み、最近では大正時代を代表する美術蒐集家の芝川照吉のコレクションが、京都国立近代美術館に寄贈されたことから、改めてその奇妙で魅力的な作品の数々が披露目される機会もありました。芝川

もつて使用されていたことの証でもあります。本展の副題にある「野に咲く工芸」という言葉は、身近な植物の写生から模様を作りだした藤井の制作態度を表わしたのですが、よくよく考えてみれば、藤井の作品の、野に咲く花のように我々の感情に寄り添ってくるその佇まいにもぴたりと当てはまるものだと言えます。

照吉は、大阪で毛織物商を営んでいた芝川商店の婿養子となり、石井柏亭との出会いをきっかけに美術品蒐集、もつと例えば若き芸術家たちの支援者たる活動に積極的に身を投じるようになった人物です。重要文化財にも指定されている岸田劉生《道路と土手と堀(切通之写生)》の最初の所有者であったと聞けば、その眼の確かさ、美術にかける熱意のほどが窺われるのではないのでしょうか。その芝川が劉生と並んで多くコレクションしたのが藤井の作品で、現存するだけでも三十六点を数えます。実際に作品を見ていただければ分かりますが、それらの状態は必ずしも良いとは言えません。しかし、このことは翻つて、お盆や郵便箱など、藤井の作品が作品というよりは、所有者の生活を構成する実用品として、愛着を

本展では工芸品とならんで、日本画も数多くご紹介いたします。工芸に動みながらも、藤井にとつて日本画は常に魅力ある存在だったはずで、一九二二年には日本美術院展に出品した《山苧薬》(当館所蔵品)が入選して院友に推挙され、この時期に制作された《四季草花図》や《日光三部作》には、空間恐怖症かのごとく画面を埋め尽くす描写や、植物の葉や花の執拗なまでの描き込みによって、奇妙なりアリティが付与されており、特異な作品と言わずにはいられません。また、身近なものに向けられていた視線は、後年、遠く空にも向けられ、煙突や土星を描いた作品には、不思議な浮遊感が漂っています。見れば見るほど面白い。そんな藤井作品を、この機会に多くの方にご覧いただければと思います。

会期：平成26年4月5日(土)～6月1日(日)

いろいろ展覧会の作品集荷について書いてきましたが、連載も今回までです。

展覧会企画は多くの人たちに支えられています。特に旅の仲間である美術梱包・輸送を専門とする日通・ヤマトの皆さんには大変お世話になってます。安全な輸送、丁寧な梱包、そして展示の飾り付けまでの一連の作業は信頼関係なくしては成り立ちません。日通・山崎、ヤマト・神取の二人のチーフは無理難題を厭わず、いつも万全な手配をしてもらいました。どんな場所でも何とか車を着けてくれる武藤の専務と一定速度で慎重に走り続ける山口君の日通陣、パチンコ好きのヤマトの山本さんや運転席にお腹の使えそうな長谷川君は梱包作業もお手の物で、多くのドライヴァーたちには旅の安全をいつも担ってもらっています。

私の学芸員としての梱包技術は、集荷の際の梱包を通して日通・ヤマトの技術を学んだものです。特に日通の技術は諸先輩たちから面々と受け継がれ、武具・甲冑をはじめとして和物に強みを発揮して

います。何度も遠距離を共にした小長谷君、美大出の新人も今では中堅としてその技術を繋ぐ重責を担っています。海外からの輸入に強いヤマトには、近藤・吉川両氏に館のオープンを大いに手助けしてもらいました。また両社とも名古屋支店のみならず、集荷の先々での応援組にも大いにお世話になっています。

集荷には新聞社事業部の企画担当も随行する場合があります。中日新聞の古田・杉本、東京新聞の中田・垣尾、朝日新聞の小倉の諸氏はやはり旅の仲間です。

もちろん他館の学芸員や集荷先の協力が大前提ですが、集荷作業だけでも多くの人の協力あつてものです。ポスター等のデザイナーにはじまり図録の印刷、会場施工に集荷・展示、会場の運営から空調管理・清掃など、ひとりではできないチームワークの賜物が展覧会なのです。

## COLUMN & TOPIC

去る十二月十六日、年間パスポート購入者限定イベント「よりみち美術館 祈りのススメ」を開催いたしました。「祈・P R A Y」展に関連して、市内を巡るバスツアーと展示説明会を実施しました。

今回の企画の発端は、「展覧会に市内の文化財が出品されるなら、所蔵先の案内マップが欲しい」「いっそのことバスツアーをしたい」という思いつきでした。思い立ったのが十月初め頃で、短期間での準備となりました。

バスツアー訪問先への交渉やイベント告知など準備することはいろいろありましたが、中でも個人的な山場は参加者のみなさまにお配りした「よりみち帖」です。よりみち帖は今回のイベントのためだけに作成した小冊子で、「祈・P R A Y」展に出品された作品の所蔵先とバスツアーの訪問先を地図付きで案内しています。地図を作成するにあたり、寺社や古墳の位置や概要を調べただけでも一苦労でした。生まれも育ちも岡崎ですが、まだまだ知らないことばかりだと実感しました。慌ただしく迎えたイベント当日

は、晴天に恵まれたお出かけ日和でした。最初の訪問先は日本福音ルーテル岡崎教会です。こちらは二〇一三年七月に国登録文化財に選定された建物で、光あふれる明るい空間でおだやかなひとときを過ごすことができました。次に向かったのは滝山寺・日吉山王社・滝山東照宮です。こちらでは関係者の方々のご厚意により、普段は入ることのできない滝山寺本堂および滝山東照宮拝殿の内部を見学させていただきました。

いずれの場所でも温かく迎えていただき、また参加者の方々が熱心に見学されていたのが印象的でした。最後になりましたが、関係各所ならびに参加者のみなさまに御礼申し上げます。





## 書籍紹介『漂い果てつ』

堀江登志実

今年刊行された三田村博史氏の歴史小説『漂い果てつ』は佐久島出身の船頭重吉が書いた「船長日記」に題材をとったものです。漂流という想像を絶する極限状況に陥った人間がどのような行動をとるのか、さらに多くの船乗りの仲間を失った重吉の生還後の生き方、心のなかの葛藤には共感を覚えざるをえません。

今年はこの船頭重吉が伊豆沖で遭難、漂流して二百年目にあたります。西尾市では展示、講演会、紙芝居などの催事が行われました。新城市設楽原資料館では「漂流200年『船長日記展』」の展覧会が開かれました。この小説もこのブームのなかで刊行されたものでしょう。船頭重吉は佐久島で生まれで船乗りになり、文化一〇年（一八三二）十一月、遠州灘で遭難し、太平洋を四八四日間漂流したのち英国船に救助され、米大陸に上陸、のち帰国したという数奇な人生を送った人物です。その重吉の漂流記が「船長日記」です。

その「船長日記」は新城に役所を構えた交替寄合菅沼氏家臣の

池田寛親が重吉から聞き取ったものを文政五年（一八二二）にまとめたものです。現在、新城市の宗堅寺に残されています。日記は池田寛親が記しているように重吉が聞いたものをありのままに記したと記しています。その記述姿勢は事実を記すのみですが、そこには私見を抑えることにより多くの人に読んでもらおうとする意図があります。それは鎖国下でありながらも海外の情報を意欲的に入手して広めようとする意気込みでもありません。



重吉が亡くなった仲間のために建てた供養碑

## COLUMN & TOPIC

## 書籍紹介『地獄探訪』

浦野加穂子

「地獄探訪」―何とも恐ろしいなタイトルですが、本書の帯にはこう書かれています。《史上初！地獄観光ガイド》!?

著者は愛知教育大学の鷹巣純教授です。当館では今年度前期のミュージアム講座「仏教絵画に親しむ」（全五回）の講師を務めて頂きました。その内容は「日本仏画の夜明け」「密教」「浄土教」「釈迦信仰と禅」「仏教絵画とメディア」など毎回キーワードとなるテーマを設け、飛鳥から江戸時代に至るまでの仏教絵画の歴史を辿るものでした。画像を多用し、時代背景や仏教絵画の成り立ち、そこに込められた意味などを、まさに現代版《絵解き》のように分かりやすく解説して頂きました。

鷹巣先生は実は日本でも数少ない地獄絵の研究で、主に中世の地獄絵を分析し、当時の世界観や死生観を探究している、まさに地獄のオソリティーです。本書は地獄先生（鷹巣先生）が漫画家の真野匡さんとともに敢行した、あの世（地獄）ツアーのコミックエッセイです。一行は険しい死出の山を登

り、三途の川を越え、十王の裁きを受けて、様々な地獄や六道を巡って行きます。その行程が漫画で分かりやすく描かれ、各コーナーの末に鷹巣先生による詳細な解説があります。刃物で刻まれたり、焼かれたり…、心身ともにあらゆる責め苦しみに苛まれ続ける地獄。しかし地獄の亡者の刑罰は、程度の違いはあっても、現世に生きる私たちが、日常生活の中で周囲（人・動物など）に対して行っていることかもしれません。地獄が存在するかどうか分かりませんが、地獄の残酷さを描くことで、他者の痛みに気づくこと、そして現在の行いを改めることが大切なのではないでしょうか。今をどう生きるか。年の終わりに考えさせられた二冊です。

（朝日新聞出版、二〇一三年）



# INFORMATION

収蔵品展

## 暮らしのうつりかわり

2014年1月11日(土)～3月23日(日)

■子ども向け展示説明会「子どもわくわく!教室」

対象:小学生

日時:1月25日(土)、2月8日(土)、3月2日(日)

いずれも午前11時～

■展示説明会

日時:1月25日(土)、2月8日(土)、3月2日(日)

いずれも午後2時～

※「暮らしのうつりかわり」展は学習支援展示を兼ねています。平日は学校団体見学がありますのでご理解のほどお願いいたします。



\*2011年に開催した「村山槐多の全貌」展。同展を企画した村松和明(当館学芸員)による著書「引き裂かれた絵の真相 天折の天才 村山槐多の謎」(講談社)が、この度出版されました。

### 趣味

趣味のひとつに迷子がある。仕事の帰りや散歩の時、ふと思いついていつも通らない路地に入ってみる。確信的迷子、と自分では呼んでいる。

表通りから路地に足を踏み入ると喧騒は遠くに聞こえ、家陰で昼でもほの暗い。不安や冒険心が煽情されて、迷子はワクワクの連続である。自分がどこにいるか分からなくなつてニヤリ。美味しそうなパン屋とか見つけてニヤニヤ。見慣れた道に出た瞬間はたまたまなく嬉しくて、それが近道だった時なんて小躍りしたくなる。日常から徒歩五分、手軽に味わえる非日常感が良い。

そんな迷子に、原動機付自転車という心強い相棒が仲間入りした。路地裏に迷い込むのに車は向かない。自転車も良いが、原付だと移動範囲が飛躍的に拡大する。春が来たら矢作川沿いに遠征しようと計画中である。どんなワクワクが待っているか。想像するだけで今からニヤニヤである。

桜前線と共に私も南下します。四月以降、西尾・碧南あたりで路地裏をニヤニヤ走る原付を見かけても、どうかそつとしておいてやってください。怪しいものではないので通報もしないでください。どうかお願いします。お願いします。(湯)

### おしゃべり、あれこれ。

#### 時計の進化と真価

腕時計をしない人が増えている。スマホなど携行するものに時計機能が装備され、時刻の確認には事欠かないからか。

時計の起源は、紀元前三五〇〇年頃のエジプトの日時計に遡り、機械式の時計は、二二〇〇年頃のヨーロッパの時計塔からとされる。それから六〇〇年を経て、日本の時計が歴史を変えた。一九六〇年代のクォーツ時計の実用化である。この時遅れをとったアメリカの時計業界は壊滅的となった。先ごろそのアメリカで原子時計の腕時計化という報道があった。原子時計は国際標準時間に使われ、二〇〇〇年に二秒しか狂わないという代物。これでアメリカの時計業界はクォーツ襲来以来の雪辱を晴らせるのか。

いずれにせよ私は、電子回路の時計は好きになれない。対して歯車を重ねて時を刻む機械式時計は、時を追い求めてきた人々の叡智のように思われる。腕時計などは、なおさら小さく精緻を極め、その個性的な面立ちを眺めながら運針音を聴くと、時の深遠さに想いがめぐらされる。

私は自分の生年に発表され、現在でもその意匠を守り製造されている、スイス製のデイトナという腕時計を愛用している。機械式の複雑時計で、日に三秒ほどの誤差を生じさせるが、むしろそこに人の手で組み上げられた温かさや人間らしさのようなものを感じる。

時計は正確でなければならぬとする向きもあるが、いかに精度が高くとも、私は原子などというものを身に付けて歩こうとは思わない。(村)

編集後記 | 早いもので年も明け、恒例となっている民具・民俗資料をご紹介します「暮らしのうつりかわり」展が始まりました。数十年、もっと言えば数年のうちに、私たちの暮らしは驚くほど変化していきます。近年、アーカイブ事業の重要性はますます注目されていますが、そのなかで、「もの」だけでなく、「もの」を使っていた人たちの「声」や「記憶」を如何にアーカイブしていくかが、大きな課題にもなってくるのでしょうか。(千葉)

表紙図版：昭和30年代茶の間風景再現(平成24年度展覧会の様子)



開館時間 午前10時～午後5時

※最終の入場は閉館時間の30分前まで

休館日 月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)

年末年始 ※展示替えのため臨時休館する事があります。

[岡崎市美術館ニュース/アルカディア] 第59号 2014年1月発行

編集・発行 岡崎市美術館(マインドスケープ・ミュージアム)

〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町1-1 岡崎中央総合公園内

TEL.0564-28-5000(代表)

岡崎市美術館

<http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/index.html>

ARCADIA